## OB・OGと語る会

毎年学部３年生を対象に授業の一環として行われている恒例の「ＯＢ・ＯＧと語る会」が今年は７月10日に開催されました。今回は、小林利武氏（1991年物質工学科卒業、1993年工学研究科修了　現職：大日本印刷株式会社　住空間ＣＳセンター副センター長）に「私が思う　会社と仕事」という演題で、米山俊夫氏（1975年応用化学科卒業、1978工学研究科修了、元株式会社資生堂常勤監査役）に「資生堂での会社生活38年を振り返って」という演題で講演をしていただきました。

講演後はお二方を囲んで、懇親会が行われ、その席上でも熱心に話し合う姿が見られました。以下にお二方のご講演の内容や感想と学生たちのアンケート結果を掲載させていただきます。

本会の参加者からは大変良い機会を提供いただいたと非常に好評で、今後も継続開催の要望が寄せられました。

（会誌グループ）

# 国大化学会 OB・OG と語る会に参加して

平成３年物工卒　小林利武

６月初めに横山先生から講師の依頼を受けました。私も入社25年をむかえた年でもあり、何かの節目かなとの思いでお受けすることとしました。学生と直接接する機会が皆無で、どのような話をすれば興味をもって聞いてもらえるか、学生時代の自分を思い出しながら考えていきました。そして題名は「私が思う　会社と仕事」としました。

最後に横浜国大に訪れたのはいつだったか、はっきりとは覚えていませんが、20年以上ご無沙汰していたと思います。会の当日はなつかしさのあまりきょろきょろしていたと思います。

会場となった講義棟は私の学生時代と変わっていなかったのですが、棟内に学生が多くにぎやかなことが印象的でした。

当日の講義内容について述べていきます。

大学を卒業してからの人生、その多くの時間を仕事に費やすことになりますが、その仕事を考えて決めていく時間は短く、十分に吟味することができているのでしょうか。そんな疑問から会社の中にいる自分の経験を少しでも伝えられたらと思いました。

仕事をする場としての会社は目的を同じくする人の集団です。多くの人、複数の組織の力を結集することでなすべきことをなしていく、その中で自分を

どのように生かしていくのか。このような話から進めていきました。

会社は様々な組織や職種があり、そこに人がいて雰囲気もそれぞれです。１部だけ見ても会社の事は語れません。自分が生かせる職場はどの会社にもあるのかもしれません。

私は会社は器だと思っています。それをどうしていくのかは人、すなわちこれからのみなさんしだいだということではないでしょうか。

これから経験する面接についても少しふれてみました。私も採用試験の面接官をやったことがあります。そこで何を思い会話をしたのか。まず誠実に語ることが重要だということです。面接では「つくろうより素直に語ること」ではないでしょうか。もう一つは、どのような状況でもあきらめず逃げず最後までやりぬくことができるかについてです。そのために「最も苦労したこと、それをどのように乗り切ったのか、それにより何を得たのか」私としては是非とも聞いてみたいことです。

何のために仕事をするのか、そして仕事とはどのような事をするのか、最近目についた身近な事例を例にして話をさせてもらいました。人は価値に対価を払うのであり価値を提供することへの営みが仕事と思います。しかし利益のみを追求する器の中にいると、仕事へのこだわりや誇りが感じられなくなり、業務をこなすだけの「労働」となってしまいます。みなさんには「労働」ではなく「仕事」をしてもらいと思っています。

このように会社と仕事について話をしてきましたが、時間を過ぎてしまい残念ながら私が働いている会社の紹介はほとんどできませんでした。

その後の懇親会は私も学生時代大変お世話になった学食、その奥のパーティースペースで行われました。学食はとても綺麗になっていて今の学生がうらやましく思いました。懇親会は立食形式で最初はなんとなくぎこちないものでしたが、料理や飲み物が進むにつれにぎやかとなり盛り上がってきました。会話のなかで多くの学生が大学院を目指し、研究を続けたいと希望している事に感心しましたが、その目的を聞くと少し不安を覚えました。会社に入ってからの学士、修士、博士の扱いや将来については正確な情報を得るようにしてもらいたいと思います。みなさんのこれからの時間はとても貴重です。有意義なものとしてもらうことを期待しています。

「OB・OG と語る会」に参加を決めてから当日までは自分自身の人生を振り返る時間ともなり、当日は学生と直接会話をすることができとても良い機会となりました。学生のみなさんは入社数年目の若い先輩のお話も聞きたいようです。後輩達のためにアドバイスしたいと思われる卒業生の方がおられましたら、是非その機会を作っていただければと思います。

最後となりますが、このような機会を与えていただいた国大化学会のみなさまに感謝するとともに、横浜国大生の今後のご活躍を期待したいと思います。

# 資生堂での会社生活38年を振り返って

昭和50年応化卒　米山俊夫

私は現在、横浜国立大学理工学部化学系同窓会「国大化学会」の役員を務めており、本会報誌の編集責任者でもある。關先生や横山会長をはじめ役員の方々から、一度学生に話をして欲しいとの要請を受け、すでに現役を退いてはいるが少しでもお役にたてるのであればと、「ＯＢ・ＯＧと語る会」に参加することにした。

演題は「資生堂での会社生活38年を振り返って」。昭和50年に工学部応用化学科を卒業し、１年間の研究生の後大学院工学系研究科を修了して㈱資生堂に入社した。学部から修士課程終了までの４年間、「溶液論」で有名な篠田耕三教授にご指導いただいた。篠田研究室では有機化合物と水の溶解性の研究と、界面活性剤による乳化、可溶化などの現象について研究を行った。論文も主筆として１報出すことができ、就職に当たっては学部と院で学んだことが活かせる会社を選ぶこととし、化粧品業界をターゲットに絞り就職活動を行った。運よく第１希望の㈱資生堂に入社することが出来た。

㈱資生堂はご存じの通り化粧品の製造・販売を主たる生業としている企業であるが、創業（明治５年、1872年）は日本初の西洋調剤薬局としてスタートしていた。その後化粧品事業やレストラン事業などの領域に進出したが、創業の精神やその後の企業理念など、入社以来共感できるものであり、定年まで働くことになった。

入社後２年間の工場勤務の後、研究所に異動し化粧品の商品開発研究に従事した。対象となる商品は女性用のクリーム、乳液、化粧下地、サンスクリーンからファンデーションなどであったが、最初は製品の使用感触を理解できず、毎日自宅に試作品を持ち帰り風呂上りにそれを顔に塗布して、使用感触を理解できるまで続けた。時間はかかったが、理解できるレベルに到達できた。ただ研究はまさに学生時代に学んだことがダイレクトに活かせる領域で成果をだすことが出来た。その中で初の固形状の乳化ファンデーション「資生堂エリクシールエマルジョンパクト」は１年間で100万個以上売れたヒット商品となり、社長賞をもらうことが出来た。

ところが、ここから思わぬ展開になった。人事異動の話しがあり、本社経営企画部でＲ＆Ｄの年度計画と長期計画を担当してみないか、というものであった。入社当初から研究職でやっていこうと思っていたが、Ｒ＆Ｄ戦略立案という仕事にも興味があったので、受けることにした。

異動後はさらに新規事業の事業管理や関係会社の経営管理などの業務も担当することとなり、思わぬ展開となった。当時人事異動の際に全く新しい業務を担当することになった時、上司から言われたことが今でも心に残っている。「人事異動で全く新しい領域の業務を担当してほしいと言われると、何故自分が担当？と躊躇するかもしれない。しかしその人事提案があるということは、君のこれまでの仕事ぶりを見て、誰かが君にその仕事を担当させたらこれまでにない成果をあげると考えたからだ。自分の可能性を拡げられるかもしれないことにチャレンジしてみるのもいいんじゃないか。」とのことであった。それ以降、全く新しい領域であっても、与えられた仕事にチャレンジすることにした。その結果、研究職に戻ることはなかったが、今振り返って見て全く後悔はしていない。

経営企画部の後は、商品企画、ファインケミカル事業部の事業管理、美容技術の研究所所長などを経て、商品開発研究担当の執行役員、ファイン化ケミカル事業・ヘルスケア事業担当の執行役員を担当した後、監査役を４年間務めた。研究員が経営管理に相当なる見識を有する者として監査役になるというのは社内では異例のことで、様々な領域の業務にチャレンジしてきた結果だと思っている。

会社生活の中でもっとも感激したことは？と聞かれたときに決まって話すことがある。

高校のクラス会で同級生だった女子から、「米山君、資生堂に務めているんだよね。いま資生堂の商

品で気に入っているものがあるんだ。」といって化粧ポーチを持ってきて、「気に入って使っているのはこれなんだ。」といって取り出した商品が、自分が研究開発した商品だったとき、鳥肌が立つほど感激した、という話である。

自分が作った商品を使って、喜んでくれている人がいるということに、大きな遣り甲斐を感じることが出来た。その後は同じような喜びを繰り返し味わいたいと考えて仕事を続けることができ、私にとって仕事に対する大きなドライビングフォースになった。

学生の皆さんには、そのような具体的なやりがいを持つことが出来るような仕事を見つけ、仕事に取り組んで、仕事を通じて世の中に貢献してほしい。

# 「OB・OGと語る会」アンケート結果

将来のことをもっとしっかり考えようと思いました。ただお金を稼ぐためだけじゃなくて、自分がやりがいを感じられる仕事を見つけたいと思いました。

院に進んでも就職するのはもうすぐだなと感じて、そろそろ自分がやりたい仕事を見つけていかなければいけないと思いました。化粧品関係に少し興味があったので、資生堂についてお話を聞けてよかったです。

化学系で仕事をするということが身近に感じた。大学は４年間、長くて６年であるが、会社は40年いる。ゆえに、企業理念を理解して会社を選ぶ重要性を感じ、就活で活かしていきたい。

先輩方の学生時代のお話しと自分の現在を比較して、「勉強はそんなに」という言葉に少し救われました。自分なりに頑張りたいと思います。

実際に仕事をしている方の視点での話だったので、今まで明確でなかった就職後の仕事に対する行動基準などがわかった。自分の仕事の目的を明確にして会社選びをすること。一方で、自分たちで会社を変えることもできるということがわかった。

自分の先輩にあたるＯＢの方が、どのような会社で、どんな仕事をしているのか、そしてそれをどう考え、思って生きてきたのか、生の声を聴く機会はなかなかないので、大変貴重な時間だった。小林さんの「決めるのもやるのも自分自身、会社に使われるのではなく自ら変えていく取り組みをすべき」という言葉が印象に残った。

受動的な生き方ではなく、自ら能動的に生きてこそ新しい道が拓け、充実した日常を過ごすことが出来ると感じ、今後意識してみようと感じた。大学生活と社会に出てからの生き方は別物ではなくつながっているということを思った。経験を積むことの大切さ、経験値は自分次第で変わることを知った。

自分が大学、院を卒業して仕事に取り組むビジョンがなかなか持てなかったが、実際に横国卒の先輩が活躍している様を見て、自分でもできるかなと少し安心できた。

時代が変わると仕事の選び方も様々に変わっているもので、自分も何を重視して仕事を選ぶか考えなくてはいけないと感じた。また、いい会社の選び方は人それぞれなんだと思えた。

先輩方が自信と誇りを持って仕事をされていることを強く感じました。今の自分には何が足りなくて、何をすれば良いのか、常に考えて生活することで成長のある大学生活が送ることができるのではないか、と考えるようになりました。

“将来”や”仕事“に関して興味を持つことが出来た。仕事をすることに対する意識をイメージすることができ、自分の将来をイメージする機会にもなった。学生時代にする選択はまだ自由なことが多いが、社会に出てからの選択は、自分の仕事や会社の責任などの責任が伴ってくるものだから大切にしていかなければならないと感じた。

御二方とも自分の仕事に自信があり、かっこよいと思った。ただ働くのではなく自分たちがやりたいことをやっていると感じた。やはり今自分が学んでいることを活かせる仕事がしたいと思った。

社会に出て働くのは大変なことなのだなと思った。将来性やお金のことばかり気にせず、自分が好きなことややりがいを感じることができる仕事がしたいと思った。

社会に出て求められるのは人間性だと感じました。勉強ができることは大切ですが、ただ

できるだけでは魅力はなく、人間にとって豊かさというものが大切であると思います。大学生活で何が得られたか、自分が何をしてきたかを意識し続けようと思います。

今まで以上に仕事や自分の将来について真剣に考えてみようと思いました。学生時代に研究した内容を活かした職業、企業を選ばれたと聞いて、今後の研究室選択にもっと真剣になろうと思いました。

大学だけでは会社のことはなかなか知ることが出来ないので、世のなかの会社についてお聞きすることが出来て良かったと思いました。将来のことを考えるいい機会になりました。

もっと幅広いことに興味を持って、いろいろ挑戦していくべきだと思った、就職活動でも就職してからも、「この職種・業種しかやらない」というのではなく、もっと自分の視野や可能性を拡げるために、いろいろな経験をするべきなのだなと思った。

理系の研究職は文系が就く仕事に比べて人とのコミュニケーションは重要ではないと思っていたが、実は人とのつながりが重要なのだなと思った。今のうちから組織を運営したり、人とのつながるような活動をした方が良いと思った。

私が大学に入学した時も学業などの高い志はあまり持たずに、ただ何となく１年間くらい過ごしてきた。もちろん、いまはその後悔の気持ちはあるが、今日の話を聞いて、これから、遅れた分を取り戻すため真面目に諦めずに勉強したいと思った。仕事をやることをただ何となく決めるものではなく、自分がやりたいことを見つけることが、こらからの将来を豊かにしてくれるのではないのかと思った。

普通の生活での課題やレポートに追われてたり、アルバイトとの両立などに対して感じる大変さとは全く違う大変さが仕事にはあるのだなと思った。自分の就きたい職種に関連している研究ができる研究室選びというのも重要だと感じた。

仕事に対する考え方と研究開発に対する意識について詳しく知ることが出来ました。ユーザーのニーズを見極めて、欲しいけどないものを作り出すことが大切であると感じた。

会社とは具体的にどういうものなのか、何を目指して入ったのか、経験者から直接聞けて良い機会になりました。強い目的をもって会社を選択しようと改めて感じた。利益やもうけることでなく、顧客のニーズや社会のことを考えて仕事をして行きたいと感じた。

今学校で課題やレポートをやったりして、課せられたものに対してこなす毎日であるが、その中に分かったことや楽しさを見い出していくことは、今後社会に出て働くときも同じなのだなと思いました。意味ある大学生活を送りたいと思いました。研究室で研究するのも、会社で働くのも、何をするにしても粘り強さや最後までやりきる意志が大切ということが参考になりました。

学生であることにあたり前と感じていたことが近い将来社会人になり仕事に就くんだということを改めて実感させてくれました、とても良い講演でした。仕事に就くにあたってとても参考になりましたし、入ってからの仕事に対する姿勢もしっかり聴くことが出来たのは社会人になってから助けになると思いました。

実際に社会に出て企業に勤めてきた人の言葉は説得力があったし、自分の可能性を再認識するきっかけになった。自分が最初に勤めた会社で定年を迎える人も多いということ、より慎重に企業を選択しようと思った。